

## 韓国におけるマックス・ヴェーバー研究の歴史と現状

金 哲 雄

### 1 はじめに

筆者の知る限り、日本において、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と『儒教と道教』に関連づけて、「マックス・ヴェーバーと日本」、「マックス・ヴェーバーと中国」を研究対象にするもの（富永健一『マックス・ヴェーバーとアジアの近代化』講談社、1998年など）が数多く存在するが、「マックス・ヴェーバーと韓国」を研究対象にするものは、皆無に等しい。そして、韓国においてもそれはきわめて少ないのが現状である。韓国は、東アジアにおいてもっとも儒教が根付いているとともに、総人口の約4分の1がプロテスタントで、韓国最大の宗教勢力になっているほど、プロテスタンティズムが本格的に浸透した国である。それゆえ、「マックス・ヴェーバーと韓国資本主義」を研究対象にすることは、ますます重要なものになってきているといえる。

このような視点から、筆者は、これまで「マックス・ヴェーバーと韓国資本主義」という研究テーマの下で、朝鮮王朝（李朝）時代、植民地時代を中心に、韓国資本主義の発展過程において儒教とプロテスタンティズムがどのように関係してきたかを、ある程度明らかにしてきた<sup>(1)</sup>。

本稿の目的は、マックス・ヴェーバー研究が韓国において今日までどの程度の深さと規模で行われてきたか、その歴史と現状を明らかにすることである。

これによって、「マックス・ヴェーバーと韓国資本主義」の研究テーマにとっての課題、その位置づけを明確にし、この研究テーマをさらに深めていきたい。便宜上、韓国において社会科学が導入された時から1950年代までを第一時期にして、1960年代、1970年代、1980年代、1990年代、2000年以降の六つの時期に分け、それらの時期を韓国におけるヴェーバー研究の段階として捉えて、このテーマを展開していくことにする<sup>(2)</sup>。

## 2 初期のヴェーバー研究

韓国では、1930年から最初の社会学に関する書物が生まれ始め、概論的な社会学の知識が紹介された。特筆すべきことは、そこにはマルクス、エンゲルスの唯物史観が目次にはあるが、ヴェーバーに関しては言及がなかったことである。その以降1950年6月25日に開始された朝鮮戦争までは、ヴェーバーの方法論である利害的認識方法と理念型の紹介を除いては、ヴェーバーに関する研究を見出すことはできないのである。

『社会経済史』（チョ・ギチュン訳、1953年）、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（クォン・セウォン、カン・ミョンギョ訳、1953年）、『官僚制』（ハン・テヨン、キム・ナムジン訳、1958年）、『職業としての政治、職

- 
- (1) この点に関する主な業績として、「朝鮮プロテスタントと平壤メリヤス工業」（大阪府立大学大学院『白鷺論叢』第18号、1986年12月）、「ヴェーバーの儒教論」（浅羽良昌編著『国際経済史』ミネルヴァ書房、1991年6月）、「アジア経済史研究への一つのアプローチ」（大阪経済法科大学『経済学論集』第27巻第1号、2003年7月）、「『儒教と道教』と韓国資本主義」（大阪経済法科大学『経済学論集』第29巻第2・3号合併号、2006年3月）、「儒教の経済思想と韓国資本主義——朝鮮王朝時代の経済思想をめぐって——」（大阪経済法科大学『経済学論集』第30巻第1号、2007年1月）、「韓国資本主義における儒教の歴史的根源——家産官僚制、家族制度を中心に——」（大阪経済法科大学『経済学論集』第31巻第1号、2007年12月）を挙げておきたい。
- (2) キム・ジュンソプ「韓国におけるマックス・ヴェーバー研究」（韓国語）（韓国人文社会科学会『現象と認識』第4巻第4号、1980年参照。1970年代までのヴェーバー研究については、基本的にこの文献に依拠している。

業としての学問』(イ・ギョング訳、1959年、チェ・ムナン訳、1963年)などの書物が韓国語に翻訳されながら、ヴェーバーが完全に紹介され始めていったのである。

また、総合雑誌に掲載された業績も、初期のヴェーバーについての紹介と理解に大きく貢献した。主として経済と関連したチェ・ムナン「経済倫理」(『思想界』、1957年2月)、「国民国家と経済政策——『マックス・ヴェーバー』の経済思想——」(『財政』、1957年11月)、「ゾンバルト、ヴェーバー、シュンペーターの資本主義観」(『思想界』、1960年4月)、「ヴェーバーの近代資本主義省察」(『思想界』、1960年6月)、「マックス・ヴェーバーの東洋社会観——東洋における資本主義の性格——」(『思想界』、1964年4月)、「近代資本主義の形成に関する考察」(『青丘大論文集』、1965年)、資本主義に関してウ・キド「マックス・ヴェーバーの資本主義観を論じる」(ソウル大学校商科大学『商大評論』第12号、1955年7月)、法律に関してチャン・キョンハク「マックス・ヴェーバーの法律社会学 上、中」(『思想界』1958年2月、3月)などの論文は、初期のヴェーバー紹介において一つの方向を作った。とりわけ、チェ・ムナンが、経済と関連した資本主義発展と宗教に関する紹介に終わってはいるものの、ヴェーバーの学問世界における一つの要点に触れたことは意義深いことなのである。

とくに注目すべきことは、初期段階でヴェーバーを紹介する上で大きく寄与した『思想界』において1960年6月号に「ヴェーバー死後40年」(チェ・ムナン「ヴェーバーの近代資本主義省察」、ファン・サンドク「ヴェーバーの社会学の昨日と今日」)、1964年4月号には「ヴェーバー誕生100周年記念」(カン・ミョンギュ「マックス・ヴェーバー以後の社会科学——現代社会科学に及ぼしたその影響を分析する——」、チェ・ムナン「マックス・ヴェーバーの東洋社会観——東洋における資本主義の性格——」)という特集を組んでいる点である。たとえそれぞれの二編が小論であっても、これらはヴェーバーに対する関心が大きくなった事実を示してくれているのである。

### 3 1960年代のヴェーバー研究

初期の研究と1960年代の研究を明確に区別することができる。確かに、1960年代までのヴェーバー研究は、ファン・サンドクなどによって総合雑誌に紹介された、きわめて狭い範囲の業績にとどまっていた。しかし、1960年代初頭になってはじめて、書物として作成されたヴェーバー紹介の文章と、本格的な論文が発表されるようになった。

1960年にファン・サンドクは、韓国にもヴェーバー研究の熱気を高めようと、ヴェーバー紹介の少し短めの冊子『マックス・ヴェーバー』（瑞文堂、1960、79年）を書いた。この書物は深い理論的提示や特徴がなかったが、ヴェーバーが扱った諸分野のほとんどすべてを欠かさず紹介していた。その後の1966年にチェ・ムナンによって、概略的な紹介本『マックス・ヴェーバー研究』（知文閣、1966年）が出版された。この書物もまた、本格的なヴェーバー研究といえない紹介冊子であるが、ヴェーバーを一般の人々に知らせるのに大きく貢献した。

これとともに、とくに注目されることは、1960年代初頭からイ・スング（李暉求）によって本格的なヴェーバー研究が始められたことである。

1961年9月にイ・スングは碩士（修士）学位論文「マックス・ヴェーバーにおける認識の対象」（ソウル大学校大学院）を執筆した。これは、ウ・キドによって「マックス・ヴェーバーと経済学」（ソウル大学校大学院、1953年3月）という碩士学位論文が発表された以降、はじめてのものであった。そして、イ・スングのこの論文は1960年代にヴェーバーの方法論へ関心を向けさせるとともに、彼自身が粘り強く、鋭く斬り込んでいる「イ・スングのヴェーバー研究」の出発点になったことに意味があった。

イ・スングは、それ以降連続的にヴェーバーの方法論に関する文章を書いてきた。価値理念、文化意義、価値関係、理念型などの問題に深く切り込みながら、パーソンズ（T.Parsons）、アロン（R.Aron）のような世界的大家の理論を原典に対する理解不足として批判した。と同時に、社会科学の学問的独自性

を生み出したヴェーバーに回帰して、その原典に立脚した正しい理解を追求した。イ・スングのこのような業績は1960年代にのみとどまるのではなく、1970年度へと継続された。

1960年代におけるヴェーバーの方法論に関する研究は、たとえ数名の人によって行われたが、ヴェーバー研究の初期段階としては大きな成果を成し遂げた。そして、チェ・ムナンの業績に対するイ・スングの批判によって、60年代の研究は最後の幕が下りた。

チェ・ムナン『『マックス・ヴェーバー』の理念型における問題点』（韓国経済研究所『経済論集』第4巻第1号、1965年）に対して、とくに原典からヴェーバーを理解しようとするイ・スングの態度は、有名なヴェーバー研究者の理論のみに従うとことだけで満足している状況に反省を促し、その点において立派な模範を残した。

1960年代を一つの段階とみると、ヴェーバーに対する理論的探究は、方法論分野だけに限っており、そのほかの分野はほとんどなかった。ただ、ファン・ソンモが「マックス・ヴェーバーの『資本主義の精神』の変位実態」（『イ・サンベク博士還暦記念論叢』、1964年）において「資本主義の精神」に対するフランス、ノルウェーなどの研究を紹介しているものがあるだけである。とはいえ、1970年代にヴェーバー研究が拡大していく兆候として、いくつかの大学の社会学科論文集において、未熟ではあるが、ヴェーバーに関する学生の論文を掲載していることが挙げられるだろう。

#### 4 1970年代のヴェーバー研究

韓国のヴェーバー研究は、1970年代に入って量的に拡大していった。1969年のチェ・グァンヨル「ヴェーバーとシュンペーター——社会理論を中心に——」（慶北大学校法政大学『法大論叢』第7集）に始まり、様々な分野でヴェーバーに関する数多くの業績が生まれた。

イ・スングの方法論的考察、あるいはヴェーバー理解における誤謬の指摘も、

『マックス・ヴェーバーの研究』として編集・出版され、経済学者、神学者、社会学者などにより「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」と関連した主題も取り扱われてきた（クォン・ギュシク「ヴェーバーのプロテスタンティズムの倫理観とアジアの近代化」『慶北大社会科学論文集』、1975年、キム・ヨンギ「韓国的経営倫理とマックス・ヴェーバーの合理化思想」『嶺南大学校論文集』第12集、1978年、イ・ソグ「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神関係考——マックス・ヴェーバーの仮説とその批判の性格——」神学指南社『神学指南』第44巻第2号、1977年夏、イ・ウォンガブ「マックス・ヴェーバー的宗教意識形成と資本主義の経済心意——東洋社会における、いわゆる『社会学的基礎欠如論』との対比において——」弘益大学『弘大論叢』第2集、1970年）。

これらと同じ流れの宗教社会学（クォン・ギュシク「マックス・ヴェーバーの儒教観」慶北大学校東洋文化研究所『東洋文化研究』第1集、1974年、キム・セジュン「マックス・ヴェーバーの宗教社会学に対する小考——思想史接近方法論模索のための予備的考察——」延世大学校大学院『ウォヌ論集』、1973年）、また、プロテスタンティズムの倫理とカリスマとの比較も紹介された（オ・グァンファン「ヴェーバーのカリスマとプロテスタン倫理」『宗教社会学』ソグァン社、1979年）。

法社会学に関連した業績（パク・ヨンギル「マックス・ヴェーバーの法社会学に対する考察」慶北大学校『論文集』第20集、1975年、チョ・ソンユン「マックス・ヴェーバーの政治支配理論の限界——全体主義支配形態を中心に——」『延世社会学』第2号、1977年、チェ・テグォン「わが国における公法史理解の一つの試図——マックス・ヴェーバーの支配権公法概念を中心に——」ソウル大学校『法学』第17巻第1号、1976年）、政治思想研究（ヤン・シホ「初期『マックス・ヴェーバー』の政治思想」建国大学校行政問題研究所『行政研究』第3集、1977年、「後期マックス・ヴェーバーの政治思想研究」建国大学校学術研究院『学術誌』第24集、1980年）などとともに、もう一歩進んで社会運動とカリスマを結びつけた理論に関する論文が発表された（パク・ヨンシン「マックス・ヴェーバーのカリスマ——社会運動研究の分析的概念と

して——」延世大学校人文科学研究所『人文科学』第35集、1976年6月）。

そして、シュンペーターとの比較（チェ・グァンヨル「ヴェーバーとシュンペーター——社会理論を中心に——」慶北大学校法政大学『法大論叢』第7集、1969年）だけではなく、トクヴィル（Tocqueville）やカール・マルクスとの比較を模索した業績（イ・チャングク「民主主義精神——ヴェーバーとの接点を通じてみたトクヴィルの近代化理論について——」嶺南専門学校『論文集』1976年、オ・セチヨル「カール・マルクスとマックス・ヴェーバーとの比較」『文化と社会心理理論——組織行動理論の再構成——』パギョン社、1979年）と「ヤスパースがみたヴェーバー」に関して紹介した業績（シン・トゥンヨル「ヤスパースのマックス・ヴェーバー論」『童山申泰植博士古稀記念論叢』啓明大学校出版部、1979年）のようなものが発表され、ヴェーバー研究の基盤を広げた。

このように数的に増えたヴェーバー研究の業績は、ヴェーバーに対する関心が高まるとともに、学問発展を鼓舞する上で大きな価値があった。とはいっても、この量的な拡大は質的な向上を必ずしも意味するものではなく、まだ大部分の業績は紹介とか、理解のための範囲を超えるものではなかった。そのようななかで、1970年代において韓国のヴェーバー研究で次のようないくつかの成果をみることができる<sup>(3)</sup>。

その一つが、韓国でヴェーバーを研究した社会学博士が誕生した事実である。1975年9月にイ・スングは「マックス・ヴェーバーの方法論に関する研究」で高麗大学校から、クォン・ギュシクは「マックス・ヴェーバーのプロテスタンティズムの倫理観とアジアの近代化」（1975年8月）で慶北大学校からそれぞれ博士学位を取得した。そして、同じ年にイ・ジョンスは南イリノイ大学から「近代化に関するマックス・ヴェーバーの観点」（1975年）で博士学位をもらった。これは、ヴェーバーを取り扱った、海外における最初の博士学位論文であった。

第二番目の成果は、注目すべき諸論文が発表され、ヴェーバー研究の目指す方向が示された点である。

---

(3) 同上、210～1ページ。

第一は、ヴェーバー理解の正確性を期して社会学の固有の領域を守り、社会現象の正しい理解を得なければならない、とするイ・スングの一連の業績である。彼は、社会有機体論者と構造機能論者の過誤（「ヴェーバーに帰れ（4）——社会有機体論者と構造・機能論者の過誤——」『韓国社会学』第8集、1973年）、社会学と心理学との関係（「ヴェーバーに帰れ（5）——社会学と心理学の関係——」『韓国社会学』第12集、1978年）などを明らかにしながら、ヴェーバーの学問的重要性を限りなく強調している。ここでは、一つ一つの問題に対してヴェーバーの原典に戻って解明しようとする、学問的真摯性が示されているのである。

第二に、ヴェーバーから出発して、より深めた理論を作り上げてみたパク・ヨンシン「マックス・ヴェーバーのカリスマ——社会運動研究の分析概念として——」（延世大学校人文科学研究所『人文科学』第35集、1976年6月）をみることができる。パク・ヨンシンは、この論文でヴェーバーのカリスマを、集合行動の概念を媒体体として社会運動と結びつけようとしている。彼は、カリスマを引き出す「実践的一般条件」と「構造的殊殊条件」を調べ、社会運動の構造と過程へ及ぼす方法を確かにする理論的枠を作ろうとしている。これは、今まで概念説明とか、紹介水準にとどまっていたヴェーバー研究に学問的深さを加えてくれるものとして、われわれにヴェーバー研究の一つの方向を示しているように思われる。

第三の場合は、ヴェーバーの理論とその他の理論との比較とか、他の理論との接合への試みである。これは、チェ・グァンヨルが行ったシュンペーターとの比較（「ヴェーバーとシュンペーター——社会理論を中心に——」慶北大学校法政大学『法大論叢』第7集、1969年）であり、オ・セチヨルが行ったカール・マルクスとの比較（「カール・マルクスとマックス・ヴェーバーとの比較」『文化と社会心理理論——組織行動理論の再構成——』パギョン社、1979年）においてみることができる。とくに、オ・セチヨルは、ヴェーバーとマルクスにおいて理論的型が類似していることを明らかにするために、構造分析と弁証分析という比較に正確に合わせることによって、比較研究の幼児的水準から抜け出している。



第四の場合として、ヴェーバー理論の実証的適用研究が挙げられるだろう。その代表的なものが、クォン・ギュシク「マックス・ヴェーバーの儒教観」(慶北大学校東洋文化研究所『東洋文化研究』第1集、1974年)、「マックス・ヴェーバーのプロテスタンティズムの倫理観とアジアの近代化」(1975年8月)であった。

1970年代のヴェーバー研究を締めくくるにあたって、キム・ジュンソプは次の三つの現象を指摘している<sup>(4)</sup>。

第一、ヴェーバーに関連した大学院碩士学位論文が10余編に至っているという事実である。方法論から官僚制、法社会科学、民主主義観、カリスマと正当性の関係、変動に関する後期社会学者との比較接合、サムエルソンの批判に対する再批判、そしてワイマル憲法とヴェーバーを結びつける研究などに至るまでの諸分野が扱われているのは特筆すべきである。

第二に、『世界の大思想 12——マックス・ヴェーバー——』(ソン・ジェソク訳、1973年)、『世界思想教養全書 続9——社会学論叢——(マックス・ヴェーバー)』(ヤン・フェス訳、1975年)などにおいてヴェーバーの論文数編が韓国語で翻訳され、一つの書物として出版された点である。1960年代では一冊も存在しなかったことに比して、このように韓国語で翻訳された書物の出版は、ヴェーバーが広く紹介され、その研究熱が高まっていったことを示している。

そして最後に、1970年代に入って、数多くの社会科学者の業績のなかでヴェーバーが引用されており、またヴェーバーを理論的背景として援用している事実を付け加えることができるのである。

以上簡潔に、1970年代までの韓国におけるマックス・ヴェーバー研究の流れをみてきた。「初期の紹介にとどまっていた研究と1960年代の限定された研究、1970年代の量的な膨張現象などを注意深くみながら、わが国のマックス・ヴェーバー研究は、今や本格的な研究段階へ上っていかねばならないだろう

---

(4) 同上、213ページ。

(5) 同上、213～4ページ。

う」<sup>(5)</sup>とキム・ジュンソプによって、1970年代のヴェーバー研究がまとめられている。しかし、このように1970年代においてヴェーバー研究への方向性を示す業績が発表されたものの、韓国におけるその学問的成果はまだ成熟しているとはいえないのである。

## 5 1980年代のヴェーバー研究

韓国教育學術情報院「韓国研究情報センター」によれば、韓国で発表された、1980年代のヴェーバー研究に関する論文は、年代順に整理すれば、次のとおりである<sup>(6)</sup>。

- ①キム・ジュンソプ「韓国におけるマックス・ヴェーバー研究」(『現象と認識』第4巻第4号、1980年)。
- ②イ・スング「マックス・ヴェーバーの学問世界」(『現象と認識』第4巻第4号、1980年)。
- ③ソン・ヒョンホ「マックス・ヴェーバーの没価値論と社会科学方法論」(『経営論集』第2巻第2号、1980年)。
- ④テニス・ロン「マックス・ヴェーバーの政治社会学」(忠南大学校『実雲』第10号、1980年)。
- ⑤ヤン・シホ「古代『エジプト』の官僚制」(建国大学校行政大学院『研究論叢』第8巻、1980年)。
- ⑥キム・ヨンス「マックス・ヴェーバーの社会科学方法論」(『法学研究』第23巻第1号、1981年)。
- ⑦キム・ヨンス「マックス・ヴェーバーにおける主体の問題」(『法学研究』

---

(6) 1980年代以降におけるヴェーバー研究の論文については、韓国教育學術情報院「韓国研究情報センター」(韓国語)からの資料に依拠している。ちなみに、そこでは1980年以前の論文として、イ・ハンユ「マックス・ヴェーバーの社会科学方法論とその試論的批判」(『陸士論文集』第13巻、1975年)の1編しか紹介されていないのである。

第24巻第1号、1981年)。

- ⑧チェ・ジョンゴ「マックス・ヴェーバーがみた東洋法」(『法史学研究』第6巻第1号、1981年)。
- ⑨パク・ヨンシン「韓国教会、その社会学的診断および改革の課題」(延世大学校『牧師夏期神学セミナー講義集』第1号、1981年)。
- ⑩「1981年学年度博士学位受位者論文抜粋」(東亜大学校大学院『大学院論文集』第6巻、1982年)。
- ⑪カン・フィギョン「マックス・ヴェーバーの資本主義起源に対する再検討」(『現象と認識』第7巻第2号、1983年)。
- ⑫イ・チュソン「マックス・ヴェーバーの方法論考」(『産業研究』第5巻、1983年)。
- ⑬キム・ジョンギ「西欧的発展イデオロギーの分析的考察」(『論文集』第5巻、1985年)。
- ⑭チョン・ソンウ「マックス・ヴェーバーの近代資本主義発生論 II」(『韓国社会学』第20巻第2号、1986年)。
- ⑮ヤン・チャンサム「マックス・ヴェーバーのプロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神に関する批判的研究」(『経済研究』第7巻第1号、1986年)。
- ⑯コ・ソンファン「マックス・ヴェーバーの都市記念論」(『学林』第8巻、1986年)。
- ⑰チョン・ソンウ「マックス・ヴェーバーの古代社会論・1」(『社会と歴史』第6巻、1987年)。
- ⑱チェ・ジェヒョン「マルクスとヴェーバーのアジア社会観」(『東亜研究』第11巻、1987年)。
- ⑲キム・ジョンズ他「行政刷新に関する小考——韓国行政の民主化への障害と戦略——」(『行政問題論集』第8巻、1987年)。
- ⑳パク・ムノク「退溪の官僚観」(『退溪学研究』第1巻、1987年)。
- ㉑チョン・ソンウ「マックス・ヴェーバーの古代社会論・2」(『社会と歴史』第10巻、1988年)。

②②キム・チョルジャ「カール・マルクスの社会階級論議」(『論文集』第22巻第2号、1988年)。

②③チャ・ソンファン「19世紀方法論論争とマックス・ヴェーバーの現実探究科学論」(『現象と認識』第7巻第4号、1989年)。

以上23編のうち、社会学に関するものが①⑦、②①、②②の3編、資本主義の精神に関するものが①①、①④、①⑤の3編、科学に関するものが③、⑥、②③の3編、儒教に関するものが①の1編、アジアに関するものが⑧、①⑧の2編、そして韓国に関するものが①、⑨、①⑨、②⑦の4編などである。

## 6 1990年代のヴェーバー研究

1990年代のヴェーバー研究に関する論文は、年代順に整理すれば、次のとおりである。

①ソ・ヨンジン「文化科学の客観性に関する小考」(『韓国行政学報』第24巻第3号、1990年)。

②ソン・ヨンマン「マックス・ヴェーバーの会心の微笑み」(『韓国論壇』第27巻第1号、1991年)。

③キム・ウォンドン「ドイツの資本主義的産業化・階級・民族国家」(『社会と歴史』第31巻、1991年)。

④パク・ヒョンモ「マックス・ヴェーバーの政治思想小考」(『歴史と社会』第6巻、1991年)。

⑤パク・チドン「構造機能主義と歴史的唯物論による科学方法論比較研究」(『社会科学研究』第1巻、1991年)。

⑥ Otto, Wolf Dieter 「ファシズムの魔術に関してトマス・マンの短編『マリオと魔術師』におけるファシズムの解説」(『ブイヒノと現代文学』4号、1991年)。

- ⑦イ・ヤンホ「カルヴァンの経済思想」(『神学論壇』第20巻、1992年)。
- ⑧チョ・ヨンレ「経済と宗教相関問題とその現代的意味について」(『経済論文集』第7号、1993年)。
- ⑨コ・ソンファン「マックス・ヴェーバーの循環的都市発展論」(『人文科学』第69・70巻、1993年)。
- ⑩キム・ハンギュ「科学的方法活用の妥当性評価基準に関する研究」(『韓国行政学報』第27巻第4号、1993年)。
- ⑪ハン・ギチョル「官僚主義的教育運営の能率性と限界性」(『教育哲学』第12巻第2号、1994年)。
- ⑫パク・ソンファン「韓国の宗教発展と文化的変容」(『韓国社会学』第28巻第4号、1994年)。
- ⑬イ・ジョンス「ヴェーバーの『倫理論文』を再び読む」(『社会科学研究』第5巻、1994年)。
- ⑭パク・スングル「書評 チョン・ソンウ他『マックス・ヴェーバー社会学の諸争点』、パク・ソンファン『マックス・ヴェーバーの文化社会学と人間学』」(『韓国社会学』第29巻第2号、1995年)。
- ⑮ヤン・ヨンジン「マックス・ヴェーバーの宗教儀式理論に対する一考察」(『東国社会研究』第4巻、1995年)。
- ⑯Jun, Sung-Pyo「社会学的観点からのPOWER——理論、概念的問題点、および素朴な提案——」(『社会科学論集』第5巻第2号、1995年)。
- ⑰キム・ジョンギル「都市社会政策の形成および発展過程に関する研究」(『地域福祉政策』第9巻、1995年)。
- ⑱イ・ジョンス「『ヴェーバー・ルネッサンス』の意味」(『社会科学論評』第14号、1996年)。
- ⑲クク・スングユ「圓佛教大宗師の経済観に関する研究」(『韓国東西経済研究』第6巻第1号、1995年)。
- ⑳クク・スングユ「少太山経済観の経済史的意義に関する研究」(『圓佛教思想』第19巻、1995年)。
- ㉑ソン・ヒョンホ「アダム・スミスの生産関係論」(『経済論集』第11巻、

1995年)。

- ②②コン・ボギョン「マックス・ヴェーバーの政治思想とその知的背景」(『社会科学研究』第12巻、1996年)。
- ②③コン・ボギョン「19世紀ドイツの自由主義とマックス・ヴェーバー」(『釜山政治学会報』第6巻第1巻、1996年)。
- ②④クォン・キュシク「マックス・ヴェーバーの東洋社会論」(『社会科学』第8巻第1号、1996年)。
- ②⑤キム・ホンソプ「キリスト教経済の主要テーマに対する私的回顧と新たな模索」(『統合研究』第9巻第1・2号、1996年)。
- ②⑥ソ・イジュン「マックス・ヴェーバーの科学技術概念とその方法論的意味」(『韓国社会科学』第19巻第3号、1997年)。
- ②⑦キム・マンジェ「マックス・ヴェーバーの都市社会学理論」(『国土』第186巻、1997年)。
- ②⑧キム・ジョンゲ「マックス・ヴェーバーの宗教倫理と現代資本主義」(『産業研究』第15巻、1997年)。
- ②⑨コン・ボギョン「マックス・ヴェーバーの合理化論」(『社会科学研究』第14巻第1号、1998年)。
- ③⑩シン・ジュンシク「マックス・ヴェーバーの『資本主義の精神』論に対する現代的意味」(『社会科学研究』第5巻第2号、1998年)。
- ③⑪ホン・ヨンドウ「『合理性観念の類型学的自己分化』に基づいてマックス・ヴェーバーの補完性体系を批判する」(『哲学論考』第5巻、1998年)。
- ③⑫Chon, Song-U「儒教の寛容潜在力に対する諸命題」(『外国語としてのドイツ語』第3巻、1998年)。
- ③⑬チョン・スイル「労働と人間疎外問題」(『社会科学研究』第2巻、1998年)。
- ③⑭キム・ドヒョン「マックス・ヴェーバーの法の概念」(『法と社会』第16巻第1号、1999年)。
- ③⑮シン・ジュシク「マックス・ヴェーバーの仏教論に関する研究」(『社会科学研究』第7巻第2号、1999年)。
- ③⑯キム・ソックン「儒教の倫理と資本主義の精神?——『ヴェーバー・テー

ぜ』の再吟味——」（『東洋社会思想』第2号、1999年）。

以上36編のうち、社会学に関するものが⑧、⑫、⑭、⑱の4編、資本主義の精神に関するものが⑦、⑬、⑳、㉑、㉒の5編、科学に関するものが⑤、⑩、㉓の3編、儒教に関するものが㉔の1編、仏教に関するものが⑲、㉕の2編、経済観に関するもの㉖、㉗の2編、アジアに関するものが㉘の1編、そして韓国に関するものが⑫の1編などである。

## 7 2000年以降のヴェーバー研究

2000年以降のヴェーバー研究に関する論文は、年代順に整理すれば、次のとおりである。

- ①チェ・ホグン「マックス・ヴェーバーとグスタヴ・シュモラー」（『サチョン』第51巻第1号、2000年）。
- ②キム・ミョンスク「法に対する社会学的接近」（『韓国社会』第3巻第1号、2000年）。
- ③シン・ジュンシク「マックス・ヴェーバーのヒンドゥー教に関する研究」（『社会科学研究』第8巻第2号、2000年）。
- ④パク・クァンジャク「マックス・ヴェーバーの資本主義体制に対する一評価」（『経商論叢』第21巻、2000年）。
- ⑤パク・トンチョン「社会的規則と社会連帯」（『政治思想研究』第3巻、2000年）。
- ⑥イ・スンファン「アジア的価値論争と儒教文化の未来」（『退溪学』第11巻第1号、2000年）。
- ⑦キム・スンウク「東洋の停滞原因に対する再考察」（『経済論文集』第15号、2000年）。
- ⑧チェ・ホグン「マックス・ヴェーバーとドイツ歴史学」（『西洋史論』第68

巻第1号、2001年)。

- ⑨シン・ジュンシク「マックス・ヴェーバーの佛教論に関する研究 II」(『社会科学研究』第9巻第2号、2001年)。
- ⑩キム・ドキョン「改新教と近代社会——マックス・ヴェーバーを中心に——」(『キリスト教言語文化論集』第5巻、2001年)。
- ⑪キム・サンジュン「禮の社会学的解説のための理論的但し書き」(『社会と歴史』第59巻、2001年)。
- ⑫チャン・ジュノ「マックス・ヴェーバーの経済社会学的構図と地平」(『国際文化研究』第19巻、2001年)。
- ⑬チョン・ソンウ「マックス・ヴェーバー宗教社会学の理論的型」(『民族と文化』第10巻、2001年)。
- ⑭キム・ミョンスク「西欧法の合理化過程と利害志向に対するマックス・ヴェーバーの分析」(『韓国社会学』第35巻第5号、2001年)。
- ⑮パク・チョンデ「ハバーマスの『意思疎通的行為理論』に関する研究」(『社会と哲学』第1号、2001年)。
- ⑯キム・ハンソプ「宗教と経済の関係研究史とその現代的意味についての考察」(『宗教文化研究』第3号、2001年)。
- ⑰パク・ヨンフィ「比較の比較、カール・ハインリッヒベーカー (Carl Heinrich Becker) とマックス・ヴェーバーのヨーロッパとイスラム文明比較」(『西洋史論』第72号、2002年)。
- ⑱イ・ビョンヤン「朝鮮初期における官僚制の合理性に関する研究」(『政府学研究』第8巻第1号、2002年)。
- ⑲ハン・ジョンズ「マックス・ヴェーバーの社会科学方法論」(『韓蒙経済研究』第10巻、2002年)。
- ⑳キム・ドキョン「国家、文化、社会——共同体類型と社会学理論——」(『社会と理論』第1号、2002年)。
- ㉑チョン・テシク「性理学に対するヴェーバー的一考察」(『社会と歴史』第62巻、2002年)。
- ㉒キム・ドキョン「マックス・ヴェーバーと精神分析学」(『社会と理論』第



2号、2003年)。

- ㉓チョン・テグク「マックス・ヴェーバーの儒教テーゼと韓国社会」(『社会と理論』第3号、2003年)。
- ㉔チェ・チウオン「マックス・ヴェーバーの文化概念と合理主義概念の解説」(『政治思想研究』第8巻、2003年)。
- ㉕キム・ソンホ「主客を越えて」(『韓国政治学会報』第37巻第2号、2003年)。
- ㉖チョン・ソンウ「マックス・ヴェーバーの儒教論」(『南冥学研究』第16巻、2003年)。
- ㉗イ・ナムジョン「王禹稱の生涯と詩」(『中国文学』第40巻、2003年)。
- ㉘チョン・ソンウ「マックス・ヴェーバーとの仮想対談(Ⅰ)」(『社会と理論』第4号、2004年)。
- ㉙カン・フィウオン、ホン・ソングク「マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』」(『社会科学研究』第8巻、2004年)。
- ㉚キム・チャンソン「ローマ共和政初期の地域統合とムニキピウムの起源」(『西洋古典学研究』第22巻、2004年)。
- ㉛ナ・イホ「資本主義の精神」(『西洋史論』第80号、2004年)。
- ㉜キム・フンフィ「学校単位の責任経営制を通じた単位学校の責任性確保」(『教育行政学研究』第22巻第1号、2004年)。
- ㉝チョン・ソンウ「近代性——一つなのか多様なのか?——」(『社会と理論』第6号、2005年)。
- ㉞ファン・テヨン「孔子の中庸的周易観とわが歴代国家の著筮慣行に関する考察」(『政治思想研究』第11巻第1号、2005年)。

以上33編のうち、社会学に関するものが②、③、⑪、⑫、⑬の5編、資本主義の精神に関するものが④、⑨、⑩、⑬の4編、科学に関するものが⑭、⑮の2編、儒教に関するものが⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯の6編、仏教に関するものが⑥の1編、アジアに関するものが⑦の1編、そして韓国に関するものが⑧、⑯、⑰の3編などである。

## 8 1980年代以降のヴェーバー研究における特徴

1980年代以降の韓国におけるヴェーバー研究には、1980年以前のそれと比較してみると、次のようないくつかの特徴をみることができる。

その特徴の一つは、1980年以前には数編にしか存在しなかった、ヴェーバー研究に関する学位論文が、1980年代以降おびただしく誕生していることである。韓国教育学術情報院「韓国研究情報センター」によれば、その数を年代別でみれば、1980年代では27編、1990年代では39編、2000年以降では18編、分野別でみれば、ヴェーバーに関するもの19編、社会学に関するもの10編、倫理に関するもの8編、科学に関するもの8編、資本主義の精神に関するもの7編、合理性に関するもの5編、儒教に関するもの2編、価値に関するもの4編、病理現象に関するもの3編、仏教に関するもの1編、経済観に関するもの1編、人間疎外に関するもの1編、その他に関するもの15編の計84編にも及んでいるのである。

第二の特徴は、ヴェーバー研究において社会学、倫理、科学、資本主義の精神などの諸分野の理論が深まり、その学問的成果が成熟してきている点である。

この点で注目すべき書物として、チョン・ソンウ他『マックス・ヴェーバー社会学の諸争点』（チョン・ソンウを中心にして80年度末から活動してきた「理論学会」の「ヴェーバー研究会」の読書会における成果、ミヌム社、1995年）とパク・ソンファン『マックス・ヴェーバーの文化社会学と人間学』（パク・ソンファンのドイツ・バイロイト大学における学位論文「秩序と行為——マックス・ヴェーバーの宗教社会学において文化社会学の人間学的問題——」（1990年）を韓国語で翻訳・出版された研究書、文学と知性社、1992年）を挙げるこ

---

(7) パク・スングル「書評 チョン・ソンウ他『マックス・ヴェーバー社会学の諸争点』、パク・ソンファン『マックス・ヴェーバーの文化社会学と人間学』（韓国語）韓国社会学会『韓国社会学』第29巻第2号、1995年、433～4ページ。

とができる。この二つの著書は、次の二つの点で既存の韓国社会学界におけるヴェーバー理解の枠を飛び越える観点を提供しているように思われる<sup>(7)</sup>。

第一は、「1970年代のヴェーバー研究」において述べたイ・スングの一連の業績、とりわけ「ヴェーバーに帰れ」という彼の有名な命題において現れているように、ヴェーバー的理念型の知識産婆術的性格を良く認識しながら、現代社会の諸問題の地平へまでヴェーバー的認識の観点をその研究範疇から乗り越え拡張しようとする努力が明確にみえる点である。第二は、広義の文化と支配という概念の下で総体的社会理解を志向する比較歴史的研究に従う解析学的社会研究の価値を蘇らせることによって、今日の「ヴェーバー・ルネッサンス」の意味を深く省察することができる認識地平を韓国の社会学界に提供している点である。

この点に関する、もう一つの大きな業績は、イ・スング（李隣求）教授停年退任記念論文集刊行委員会『Max Weber（マックス・ヴェーバー）と社会学研究』（1992年）であらう。

この論文集には、「第Ⅰ部 Max Weber の社会学」においてキム・テファン「Max Weber の人間と学問」、キム・ヨンホ「Max Weber の市民社会」、シン・ジュンシク「Max Weber の儒教論に関する研究」、ヨム・ドンフン「Max Weber の行為論における合理性と非合理性の問題」、キム・ミョンスク「Frank Parkin の Weber 論に対する批判」、パク・ソンファン「韓国における支配構造としての家産制の文化的意味」の6編、「第Ⅱ部 社会不平等論」においてヤン・チュン「中間階級の理論的争点」、キム・ジュンヨン「ホワイトカラーの労働過程研究試論」、キム・ウォンドン「ギドンスの階級構造化理論」、キル・テグン「韓国社会における階級葛藤制度化の社会経済的条件」の4編をはじめ、「第Ⅲ部 構造変動論」において5編、「第Ⅳ部 社会発展論」において6編、「第Ⅴ部 社会行為論」において4編、「第Ⅵ部 社会問題」において4編、計29編の論文が執筆されている。ここではとりあえず、儒教に関する論文としてシン・ジュンシク「Max Weber の儒教論に関する研究」、韓国に関する論文としてパク・ソンファン「韓国における支配構造としての家産制の文化的意味」とキル・テグン「韓国社会における階級葛藤制度化の社会経済的条件」

に注目しておきたい。

第二の特徴と関連して、第三番目の特徴は、ヴェーバー理論の実証的適用研究がさらに深化した点である。儒教に関する論文が、筆者の知る限り、1980年以前には クォン・ギュシク「マックス・ヴェーバーの儒教観」（慶北大学校東洋文化研究所『東洋文化研究』第1集、1974年）のただ1編に過ぎなかったものが、「韓国研究情報センター」によれば、1980年代以降8編が執筆されている。

その代表的なものが、チョン・ソンウ（全聖佑）「マックス・ヴェーバーの儒教論——批判的再構成——」（慶尚大学校・南冥学研究所『南冥学研究』第16巻、2003年）である。彼は、ヴェーバーの儒教論、とくに中国の官僚制などに対するその否定的評価を批判的に再構成しながらも、それが依然として重要な研究対象であるとみている。複合的な相互作用関係に対する理論的・歴史的論証を重視するヴェーバーからすれば、韓国の学界において一時大きな関心事となった「儒教資本主義論」は軽薄な還元論的教条主義に陥ったスローガンにすぎないのであるという<sup>(8)</sup>。

ところで、「儒教資本主義論」に関する論文としては、キム・ソッキン「儒教の倫理と資本主義の精神？——『ヴェーバー・テーゼ』の再吟味——」とチョン・テグク「マックス・ヴェーバーの儒教テーゼと韓国社会」を挙げることができる。前者では、「儒教と資本主義」問題の出発点ともいえる「ヴェーバー・テーゼ」を再吟味しながら、現世に対する合理的な適応という契機が東アジアの経済発展に次第に適用したこととして解説している。また、後者では、儒教を東アジアにおける近代的資本主義を促進する要因として捉える見解に注目して、社会構造的条件を重視しながら儒教と近代資本主義発展との関係を究明しようとしている。

また、この実証的適用研究でもう一つの特筆すべき点は、ヴェーバー研究においてアジア、とりわけ韓国に関する論文が少しずつ誕生していることである。その韓国に関する論文は、1980年以前ではほとんど存在しなかったのが、「韓国研究情報センター」によれば、1980年代以降では9編にも及んでいる。

そして、このような業績のなかで代表的なものが、パク・ソンファン『マッ

---

(8) 金哲雄「韓国資本主義における儒教の歴史的根源」、19～21ページ参照。

クス・ヴェーバーの『韓国社会論』(UUP、1999年)である。ここでは、ヴェーバーの家産制と家産官僚制に関する概念に依拠して、韓国の伝統的支配構造の歴史、家産官僚制において、実質的な行政手段と行政権に対する専有をめぐる、支配者と行政幹部との間で展開された政治的権力闘争が「純粋家産制」と「身分制的家産制」との相互の力学関係として具体的に展開されている<sup>(9)</sup>。

## 9 む す び

マックス・ヴェーバーの宗教社会学には、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と『儒教と道教』という二つの柱があるといわれている。そして、この両者の関係をみると、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の論点から、『儒教と道教』では資本主義の精神が欠如していたことの論証として捉えられている。とりわけ『儒教と道教』の第八章「結論——儒教とピューリタニズム——」において、儒教の倫理と禁欲的プロテスタンティズムの倫理を比較して禁欲的プロテスタンティズムが近代資本主義を生み出す一方、儒教は近代資本主義と相いれないものとしたのである<sup>(10)</sup>。

このようなヴェーバーの視点から、韓国を研究対象にしているのが「マックス・ヴェーバーと韓国資本主義」というテーマである。この研究テーマと関連して、本稿「韓国におけるマックス・ヴェーバー研究の歴史と現状」における、以上の展開から重要な課題が浮かび上がってくる。

確かに、パク・ソンファン『マックス・ヴェーバーの韓国社会論』など、『儒教と道教』に関連づけた儒教、韓国資本主義に関する研究がある程度進展していることは事実である。しかし、この点に関する研究が全面的に展開されている状況とはいえないだろう。さらに、このような課題をその原典に徹底的に依拠しながら、深めていく必要があるだろう。

また、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と韓国資本主義と

---

(9) 同上、7～15ページ参照。

(10) 金哲雄「『儒教と道教』と韓国資本主義」参照。

の関連研究は、「儒教資本主義論」を除いては、あまり進んでいない現状である。この点に関する最近の成果としては、全聖佑「プロテスタンティズムと韓国社会の近代化——ヴェーバー・テーゼの光に照らしてみた——」（『思想』第978号、岩波書店、2005年10月）がある。ここでは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の批判的読解を通じて、韓国型の近代化プロセスにとってプロテスタンティズムが持つ社会学的および歴史的意義を探っている。そして、西欧が近代性の唯一可能な「ヴァリエーション」だとするような「ヨーロッパ中心主義」を拒否しながら、韓国型近代化における建設的および破壊的性格という二重性格を指摘して、その社会的仮説を立てている。

とりわけ、韓国におけるプロテスタンティズムと経済発展との関連についての解明は、今後の大きな研究課題になるだろう<sup>(11)</sup>。また、この点に関しては、全聖佑「プロテスタンティズムと韓国社会の近代化」において、韓国型近代化を性格づける上で重要な要因だとされている、プロテスタンティズムと儒教との相互干渉<sup>(12)</sup>についても、重要な研究課題として注目しておく必要があるだろう。

要するに、「韓国におけるマックス・ヴェーバー研究の歴史と現状」から『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』と『儒教と道教』を全面的に韓国資本主義へ実証的に適用する課題が、「マックス・ヴェーバーと韓国資本主義」という研究テーマに要求されているのである。

#### 〈付記〉

本稿は、大阪経済法科大学研究補助金による研究成果である。

- 
- (11) この点に関する既存の研究成果としては、瀧澤秀樹「韓国民衆の世界とキリスト教」、「韓国財界人とキリスト教」（『韓国社会の転換』御茶の水書房、1988年）と「韓国財界人の宗教意識」（『アジアのなかの韓国社会』御茶の水書房、2000年）、金哲雄「朝鮮プロテスタントと平壤メリヤス工業」を挙げることができる。
- (12) この相互干渉については、個人主義と集団主義の対立、収斂、あるいは共存という視点から展開されている（全聖佑「プロテスタンティズムと韓国社会の近代化——ヴェーバー・テーゼの光に照らしてみた——」（『思想』第978号、岩波書店、2005年10月、118～23ページ参照）。